

明代中国仏教考

—その大藏経開版事業とチベット仏教との関係について—

矢崎正見

はしがき

チベット大藏経の開版に関し、特に明朝治下に中国本土でその開版を見たといわれる永楽・万曆両版については、それらの雕版の経緯ならびに実態等について、なお、歴史的究明をなすべき多くの問題を含んでいる。

明代の大藏経開版事業について見ると、この時代には漢訳藏経の雕版が盛んに行われ、南蔵・北蔵・武林蔵・嘉興蔵と、太祖即位の洪武元年（一三六八年）から明末永明王の永曆十五年（一六六一年）までの三百年間に、前後四回にわたってこれが行われているのである。しかも、この間、前述のチベット大藏経開版も行われたと伝えられているのであるが、何故に、このように頻繁に大藏経の開版という大事業がなされたのであろうか。その実態は如何なるものであったのであるか。特に前記四版の漢訳藏経の開版と、永楽・万曆両版のチベット大藏経の開版にはなんらかの関係が存するのであろうか。

明代における永楽・万曆両版中、特に永楽版雕版の実態を究明する一助として、本稿にあっては、上記の問題点を、明代仏教の特色、明

朝とチベットとの交渉、十四世紀中葉から十六世紀にかけてのチベットの状況、同期における漢蔵蒙三民族の関係等を中心として探らうとするものである。

一 宋元明三朝による大藏経の開版事業

宋代：…宋朝はその建国が太祖の建隆元年（九六〇）における北宋の興起にはじまり、欽帝靖康元年（一一二七）に宋室の南遷が行われ、同じく、この年が南宋の高宗代、建炎元年に当り、以後、南宋末の衛王の祥興二年（一二七九）まで、南北併せて約三二〇年間にわたる治世がなされたのであるが、この三百余年間の宋代仏教の特色の一つとして、大藏経の開版事業が数度に亘って行われたことを挙げる事が出来るのである。すなわち、現存の経録等に名を留める大藏経目録中宋代の選出にかかるものとして、次の十二録を列挙することが出来る。

(一) 蜀版大藏経目録

北宋太平興国八年（九八三）頃の勅版。唐の智昇選、開元釈経録入藏録所載の部帙を取めたものといわれるが、現存せず。

(二)大中祥符法宝録

二十二卷、北宋大中祥符六年(一〇一三)、または同八年、楊億等奉詔選。宋の太平興國七年(九八二)より同大中祥符四年(一〇一一)までの二十九年間に訳出された經典を類別し、大乘經、大乘律・大乘論・小乘經・小乘律の五部とし、計二〇〇部、三八四卷を録したるもの。

(三)天聖釈經録

二帙、若干卷。北宋天聖五年(一〇二七)、惟淨選。至元法宝勘同總録第一卷所載で、總計六一九七卷を所収。

(四)景祐新修寶録

二十一卷、北宋景祐三年(一〇三六)ないし四年、呂夷簡等の奉詔選。大中祥符四年(一〇一一)より景祐四年(一〇三七)までの二十七年間所出の新訳諸經典類を大乘經・大乘律・小乘經・小乘律等にまとめて、計十九部、一五〇卷として収めたもの。

(五)福州東禪等覺院板大藏經目錄

宋崇寧二年(一一〇三)頃の私版。約一四五〇部、五九五函所収と伝えられるが、現存せず。

(六)福州開元寺板大藏經目錄

南宋紹興二十一年(一一三二)頃の私版。約五六四函所収とされるも、現存せず。

(七)安吉州思溪法寶齋禪寺大藏經目錄

二卷、南宋紹興(一一三一—六二)以後の私版。開元入蔵にかかわるものはその分類、開元寺目錄に同じ。続入蔵には分科をもう

けず、一四六四部、五九九函を収める。

(八)平江府積砂延聖院新雕經律論等目錄

二卷、南宋の端平元年(一二三四)にかかる私版。分類法は高麗の大藏經目錄に同じで、一四二九部を五四八函に収める。

(九)契丹板大藏經目錄

遼興宗代(一〇三一—五五)の勅版。遼の開版にかかるもので、五七九帙よりなると伝えられるが、現存せず。

(十)高麗初雕板大藏經目錄

高麗帝顯宗代(一〇一〇—三一)頃の勅版。蜀板大藏經目錄と同じといわれるが、現存せず。

(十一)広勝寺大藏經簡目

宋藏遺珍叙目所収、金の熙宗・帝亮・世宗時代(一二三五—八八)に解州天寧寺において創雕された大藏經の仮目錄。

(十二)大藏經目錄

高麗の高宗三十五年(一二四八)の勅版。その分類法は安吉目錄に準じ、計一五二四部、六五五八卷を六二八函に収める。

さらに、大藏經そのものの開版事業として、次のごときものを挙げる事が出来る。

(一)蜀板大藏經

曆宝四年(九七二)、太祖の命により、張從信が蜀の成都でその雕造を開始し、太宗の太平興國八年(九八三)までの十二年間を費して完成したもの。所収經論總卷數五千余卷。

(二)東禪寺版大藏經

また福州版ともいい、北宋の神宗代、元豊三年(一〇八〇)、福州の東禪寺の慧空大師冲真によって企てられた私版出版。慧空の弟子によってその開版事業は受継がれ、徽宗の崇寧三年(一一一四)に至る二十四年間を費し、さらにその後、政和二年(一一二二)までに新訳天台章疏を追雕して完成した。全六千余巻。

(三)開元寺版

また福州版、閩本、越本。北宋の徽宗代、政和二年(一一二二)、福建省開元寺において始められたもので、本悟・本明等の人々により、南宋の高宗紹興十六年(一一四六)に至るまで、前後四十年間を費して完成したもの。後、孝宗代、乾道八年(一一七二)に紹玉が禪宗部を加えて六千有余巻とした。

(四)思溪版

宋版ともいい、天台の淨梵、禪の懷深等によって湖州思溪(浙江省の呉興県)の円覚禪院において、王永從等の施財によって雕印された私版。南宋の高宗代、紹興二年(一一三二)前後の開版。北宋から南宋にわたるもので六千巻。この思溪版には二種あって、円覚寺版とは別に、思溪の法宝資福寺版五七四〇巻、円覚寺版より約一〇〇年後に開版され、増補追雕といわれる。

(五)磧砂版

南宋の理宗代、紹定四年(一二三二)頃、尼弘道等の発願によって、江蘇省平江府磧砂延聖寺において開版され、以後、元代まで続けられ、総数六三六二巻。

以上のごとく、宋代にあっては大藏經の雕版は頻る盛んに行われたが、後述のごとく、宋代大藏經開版の盛業が後の明代における蔵經開版事業に影響するところ、あったと考えられるのである。

元代：前代の宋朝が大藏經の目錄編纂・開版の事業を盛大に行つたのに対して、元朝のそれについては特に見るべきものがなかった。

本来、元朝の統治は世祖クビライ (Cublai, 忽必烈、一二六〇—九四) が中統元年(一二六〇)、南宋を併呑して、中国統一を行つてから、以後、元朝の第十代、その最後の皇帝順帝が明の將軍徐達等によつて北に追われるまで百余年にわたるに過ぎず、宋朝の統治期間の三分の一であつた。この元朝代において、大藏經の開版等に関する事蹟として、『仏祖歴代通載』卷第二十二、「世祖弘教玉音百段」中の記載によると、

帝命_三高僧、重整_三大藏、分_三大小乘、再標_三芳号、遍布_三天下。：帝印_三大藏三十六藏、遣_三使分賜、皆令_三得_三瞻_三仏日。：弘法寺蔵經板歴_三年久遠。命_三諸山師德、校_三正訛謬、鼎新_三嚴飾、補足以_三無_三第_三(正蔵第四十九卷史法部一、七二四中)。

帝見_三西僧經与_三漢僧經教、音韻_三不同。疑_三其有_三異、命_三阿土名僧_三对_三弁。一一無_三差。帝曰積年疑滯今日決開_{故有法} (正蔵同上、七二四下)。

等とあり、世祖は翻譯經典・蔵經に対する関心強く、大藏經三十六蔵を印行させ、諸国にこれを頒布し、また、弘法寺板蔵經の改訂を行い特に漢蔵両經典の対同を目的として、『至元法宝勘同目錄十巻』の編

纂を行ったのである。「至元録」はその巻第一の前文（正藏別巻昭和法宝総目録第二卷一八〇中）によると、至元二十四年（一二八七）、慶吉祥他二十八人による選述であるが、その編纂の趣旨は世祖が仏典の未流通と翻譯の不備に思いをいたし、釈教総統、合台薩里に命じ、パクバ（Hhagspa, 抜合思八・一二三五・九一八〇）の高弟葉璉・西藏の板底答、尾麻羅室利・畏兀兒（回鶻）の齋牙答思・慶吉祥・翰林院承旨、安藏等を大都に集めて、至元二十二年（一二八五）の春から同四年夏に至るまでの三か年間に費して完成したものである。その經典目録としての特色は、經典梵名の明らかなるものはそれを漢字に音写して附してあることと、チベット目録と対照してその有無を附している点に存する。なお、その序に、

大元天子、仏身現世間、仏心治天下。万幾暇余討論教典、与帝師一語。詔諸講主、以西蕃大教目録、对勘東土經藏部帙之有無、卷軸之多寡……（正藏別巻同上、一八〇上）

とあるが、ここにいう西蕃大教目録は、時代的にプトン（Pur-ton, 一二九〇—一三六四）以前のことであり、何を指すかは究明すべき問題であるが、ともかくも、元代において、大藏經に関する史実としては、右の「至元録」の編纂以外に、殆んど見るべきものがないのが実情である。

明代：明朝の治世は上述のごとく、一三六八年、明の太祖洪武帝の即位にはじまり、南明の末帝永明王永曆帝が一六六二年（清の康熙元年）四月、昆明で殺されるまで二九四年にわたるが、この間、大藏經の雕版事業は前後四回にわたって行われたのである。その第一回はいわゆ

る南藏の開版であった。すなわち、太祖、明初代の皇帝洪武帝の命によって、洪武年間（一三六八—一九八）、太祖一代の間に道成、一恕等によって開雕されたもので、全六三三一巻に及んだ。南方の金陵（南京）の宝庫にその版木が蔵されるところから、一般に南藏と呼ばれている。第二回も殆んど南藏とその時を同じくして開版されたいわゆる北藏。この名称の由来は、南藏に対して、その板木を北京城内に蔵する故である。これは南藏の誤りを訂正し、その欠を補うことを目的として開版されたので、南藏に比して、やや完備している。万曆年間（一五七三—一六一九）に至って、密藏禪師の発願によって方冊の大藏經を刻印し、南北両藏所収外の「大明続入藏經」として刊行した。

明代第三回目の開版大藏經は武林（浙江省）において開版された武林藏。現存しないので、その内容・開版年次等は不明であるが、一般への藏經普及を目的として開版されたもの。第四回は明末神宗の万曆十七年（一五八九）より清初に至る約七〇余年の歳月を経て完成したものの。嘉興藏・明版・万曆版・楞嚴版等とも呼ばれる。その開版は五台山において始められ、のち、江南の徑山興聖万寿禪寺で続雕され、さらに各地で分離して完成したのち、その版木を浙江省の嘉興の楞嚴寺に集めて雕印を行ったものである。明代における大藏經の開版事業は上記のごとく前後、四回にわたって行われたが、さらに、明代の大藏經開版事業に関連して記さなければならぬことは、大藏經目録の刊行である。すなわち、広く「大明三藏聖教目録」の名で知られる四巻本の北藏目録と、同じく「大明三藏聖教南藏目録」一巻が刊行されている。北藏目録には、その巻首に永樂帝成祖の大明太宗文皇帝御製藏

経讀と題する永樂八年（一四一〇）三月初九日附の讀文を掲げ、唐・宋兩代の三藏聖教序を附し、その卷末に、同じ永樂年間の九年（一四一一）閏十二月附の御製藏經跋尾と、万曆十二年（一五八四）十一月二十日附の御製続入藏經序が附記されている。この続入藏經は前述のごとく、明末の万曆年間、密藏禪師の發願により、南北両藏所収外の經論を収めたもので、わが国、黄檗宗の鉄眼が開版し、その板本を宇治の宝藏院に藏する黄檗版大藏經は続入を含めた明藏六七七一巻の翻刻である。

以上、宋元明三代にわたる大藏經の雕版事業を概観したが、総じて云えば、この三代に關して、宋明兩代は大藏經の開版事業が盛大に行われ、元代がやや中弛みということが出来よう。そして、そのことは明代の大藏經開版事業が宋代を範としてその盛業を見たとも云えるのではなからうか。すなわち、漢民族としての矜持²⁾によって、蒙古民族たる元朝による中国本土の蹂躪から、その故国を復元し、蒙古民族をその故地に追放した明朝が、彼等の誇る漢訳仏典の集大成という形で大藏經の開版事業を大に行つたと見ることが出来よう。さらにまた、明朝初代の皇帝たる太祖洪武帝が若年の折、生家の貧困の故に、村の古寺（皇覺寺）に入れられ³⁾、紅巾軍の拳兵まで僧侶としての生活を送つた経験から、仏教保護の念が篤かつたこと、また、明代歴帝は太祖のこの姿勢に倣い、歴世、崇仏をその施政の基本方針としたこともまた、明代大藏經の開版事業を盛大ならしめた一つの要因と云えよう。さらに、明代における思想界ないし仏教界一般の傾向のなかに大藏經開版事業が盛んに行われた理由を求めることが出来るのではな

からうか。すなわち、明朝における思想界一般の傾向が融合統一の方向を打出し、当時の仏教界もその影響下、諸宗統一、諸宗融合の傾向を徹底し、明末には禪と念仏の雙修を提唱した雲棲念仏の株宏、華嚴を学び禪を修した憨山大師徳清、憨山の孫弟子に當る天台の藕益智旭などの名僧が現われ、独特の統合仏教を作り上げた。そして、儒仏道三教の調和をさえ説くに至つた。このことは元代にラマ教によって圧迫されていた旧来の各宗派が復興し、ラマ教に対抗するために各宗派の団結の必要を意識したことにもよるであろうが、ともかくも、仏教界のこのような傾向は、漢訳された經律論三藏の集大成である大藏經の雕版という事業に自然な形で直結することが出来たのではなからうか。

上述のごとく大藏經開版史の上から元代と明代を比較した場合、元朝のそれには特記すべきものとして『至元録』の編纂が唯一のものであり、一方、明代の大藏經開版事業は、たとえそれが宋代の盛業を踏襲し、もつて漢文化の高揚を誇示することを目的とするものであつたにせよ、南北両藏をはじめとして、見るべきもの多かつたのは事実である。ところで、この兩朝とチベットとの交渉の実態はどのようであつたのであろうか。すでに広く知られる点ではあるが、中国本土はもとより、高麗・日本等のアジア各地に対し、さらには遠くヨーロッパ各地に対してさえ武力による侵略を行い、世界征覇をさえ志向した元朝が、隣接する小国であるチベットに対しては、その武威によつてこれを脅かすことは殆んどなく、専ら宗教政策による懐柔という方途のみを用いたのであつた。特に、クビライとパクパの交わり、それによ

る元朝のサキヤ(Saikiya)派重用は元朝のチベットに対する鎮撫工作の現われであり、この形態がチベットと蒙古との提携を深め、やがては蒙古民族の武力が裏楯となって、ダライラマ制の成立に大きく与って力があつたという歴史的展開を見たのである。そして、ダライラマ制を成立せしめる上で重要な役割りを果たしたという点では、それが単に蒙古民族のチベット民族に対する親睦とか懐柔とかであるだけではなく、チベット社会を変革するという、チベットの歴史を劃する重要な一ページを誌したことになるのである。この限りに於いて、元朝および蒙古民族とチベットとの交流の關係は誠に深甚といわなくてはならない。これに反して、明朝とチベットとの交流については、ラマ僧の来朝と、それらラマ僧に対して明王室からは国師号を授与するとか、チベットから明朝への入貢とか、個々の歴史的交流は勿論あったが、少なくとも、チベット史に大きな影響を与えるような事件は存在しなかつた。しかも、蒙古民族とチベット民族との交流の状態は元朝の滅亡後、明朝治下に入ってから変ることなく持続されたのであつた。そして、このことは明朝にとって決して望ましい筈はなかつた。だとするならば、一三六七年、元朝が滅亡し、太祖が即位して明朝の治世が始まって以来、三百年に近い明朝治下、漢・蒙・藏三民族の交流は如何なる展開を見たのであろうか。明朝は如何にその対蒙武力政策に手を焼いたか、また、チベットに対するその宗教政策を展開したのであろうか。以下、その実態について、若干の考察を進めるところとしよう。

二 明代における漢蒙両民族の交流

明朝と蒙古民族の交流の実態は、蒙古軍による明領域内への侵入と、それに対する明側の防衛・追撃に明け暮れたというのがその実情といえるのである。明朝歴代中、蒙古との戦いの主たるものを明史の記述中に探り、列挙すれば次のごとくなる。

成祖永樂帝代……この帝はその生涯を北辺の守りに捧げたとき観があった。すなわち、即位前の燕王時代、すでに父の洪武帝によって兄の晋王朱棣と共に對蒙古防衛軍の目付役とされ、洪武二十三年(一三九〇)と同二十九年(一三九六)、二度にわたって北部辺境に転戦している。そして、即位後の永樂八年(一四一〇)七月、淇国公邱福を征虜大將軍として韃靼の可汗ブンガシリ(Oljei Temür, 本雅朱里、一三七九—一四一〇)を討せたが、邱福は敗れ、翌八月には戦死したので、翌年二月、北征の詔を天下に下して親征、ブンガシリを幹(幹)難河に大敗せしめた。これを第一次北征とし、以降、永樂二十二年(一四二四)まで五回にわたる親征を行ったが、最後の第五次親征においては東蒙古韃靼部の大酋長アルクタイ(Arukai, 阿魯台、一一四三—一四二四)の乱に当って、正月、群臣と協議して北征の詔を發し、三月、親征、これを討伐したが、帰途、榆木川の畔で六十有五歳で崩じたのであつた。明朝歴代中、北辺親征中に病死したのはかれが唯一人であつたが、帝がその生涯を北辺鎮撫に捧げたのは、草創期における明朝にとって大いなる災いともいふべき蒙古民族の乱を平定して、彼等の故地を手中に収めることこそ、明朝万年の太平を齎す所以であつたか

らであろう(巻五・本紀第五―七・本紀第七)。

宣宗宣德帝代：…先帝成祖の時代に引続き、韃靼部のアルクタイならびにオイラート(Oirat, 瓦剌)部の長、トパン(Toghon, 脱敏、一四三九)等の侵入に手を焼いたが、宣德五年(一四三〇)四月には長城内の独山团山城堡を築いて、開平衛を移し、蒙古民族の侵入を防ぐため長城線の確保につとめたのであった(巻九・本紀第九)。

英宗正統帝代：…英宗はかの土木の変において遠征に失敗、蒙古軍の捕虜となった帝である。すなわち、オイラート部の長、エセン(Esen, 也先、一四五四)が正統十四年(一四四九)七月に寇し、これを親征したが、八月、土木堡においてオイラート軍に敗れ、戦死者十万、帝は北に狩られ、弟の郕王朱祁钰が即位して景帝となり、英宗を遙かに尊して太上皇帝となしたと明史は誌している(巻十・本紀第十、英宗前紀)。捕えられた英宗は、一旦、漠北に伴われたが、翌年、許されて北京の都に帰り、南宮に幽居していたが、景帝の歿後、奪内の変を経て再び即位、天順帝となった(巻十・本紀第十)。

景帝景泰帝代：…兄弟の英宗を捕虜として、一度は北京を包囲したエセンが再び大挙して寇して来たがこれを城外で撃退し、明る年を景泰元年(一四五〇)と改元、五月にはオイラート部が使を送って和を請い来り、ここにエセンとの和議は成立し、同年八月にはエセンが上皇を許して北京に帰したのであった(巻十一・本紀第十一)。

憲宗成化帝代：…景帝がオイラート部のエセンとの和議を成立したのち、明代蒙古中興の祖といわれるダヤン(Dayan, 達延、一五三三)が内蒙古を統一した前後、オルドス(Ordos, 鄂爾多斯・河套)地方

への侵入が蒙古軍によって行われた以外、蒙古の侵寇は殆んど見られなかったが、オルドス方面に二二〇華里にわたる長城を築いて、北辺の備えを固めた(巻十二・本紀第十二―巻十三・本紀十三)。

世宗嘉靖帝代：…明朝の歴代中、最も外敵の侵入に悩んだ時代であり、北方蒙古族はオルドス、陰山地方のアルタン(Altan, 阿勒坦・俺答・吉囊、一五〇七―八二)が、嘉靖十一年(一五三二)以降、年中行事のように宣府・大同・榆林地方から侵入した。特に嘉靖二十九年(一五五〇)八月、アルタンが長城を越えて大挙して侵入し、一時は北京を包囲され、京師は戒嚴状態に陥った(巻十七・本紀第十七―巻十八・本紀第十八)。

右のごとく、明史の記述によれば、明朝初祖太祖から李自成によって北京が陥ち、毅宗の自殺で明朝が滅亡するまで十七代の歴代中、七帝が蒙古とことを構えざるを得なかったのである。勿論、明朝に限らず、中国歴代の王室の最大関心事は北辺の鎮撫であること、宿命ともいふべきものがあつたが、特に、明朝の場合、蒙古民族の冊立した元朝をその北境の故地に追放することによって、自らの建国をなし遂げただけに、特に蒙古民族を彼等の故地に閉塞せしむることが、明朝万代の安泰を獲得する所以であつた。逆に、蒙古民族にとっては、漢土を奪還することは彼等にとって復讐でもあり、大元帝国再建の夢に連なるものであつた。それだけに、明代の漢民族と蒙古民族の交流といえ、上述のごとく、侵入とこれに対する防衛・反撃という闘争の繰返えし以外の何物でもなかったのである。

三 明朝とチベットとの交流

第三代ダライ、ソーナムギャムツォ (Bsoḍ-nams-rgya-mtsho, 一五四三—一八八) が蒙古王アルタン (Altan-ge-gen, 一五〇七—一八三) からターライラマ (Talaḥi-bla-na, 德海のごとく広き上人) の尊称を受けたのは十六世紀末で、明の世宗から神宗の治下であった。五代ダライ、ロサンギャムツォ (Nag-dban Blo-bzai-rgya-mtsho, 一六一七—一八二) が同じく蒙古のグシ汗 (Gu-shi-ge-gen, 固始, 一五八二—一六五六) からチベット衛蔵における宗主権を贈られ、ダライが名実共に法王即国王となったのが南明の神宗から南明末の永明王の治下であった。このような交流は明朝にとって決して望ましいものである筈はなかった。そこで、蒙古民族のチベットに対するこのような働き掛けに対抗するために、明朝はチベットに対してどのような政策を取ったのであろうか、明朝によるラマ教政策の実態は如何なるものであったのであろうか。前述のごとく、元蔵の關係に比して明とチベットとの稀薄な交流のなから、二三の史実についてその実態と明朝の意図するところを明らかにしよう。

明朝治下、チベット仏教史の上で劃期的出来事はいうまでもなく、ツォンカパ (Tson-ka-pa, 一三五七—一四一九) の出現と彼による仏教改革、そして新教ゲルクパ (Dge-lugs-pa) の出現であった。明朝としては当然、この時代におけるチベット仏教の代表者としてツォンカパを明朝に招き、これと接触しようとしたが、これが果されず、弟子のジャムチェン (Byams-chen chos-rje, 一三五四—一四三五)

を永楽帝が迎えたのであった。この間の事情はどのような展開を見たのであろうか。すなわち、永楽帝のツォンカパに対する招請、これに対するツォンカパの辞退、そして彼の代理としてのジャムチェンの明への入府等については『明史』・『明実録』等の中国側の資料においては触れず、ただ、『明実録卷之九十六』の太宗実録中の永楽十三年(一四一五)の項に、釈迦也失 (Byams-chen chos-rje Sakya-yese) に対し、夏四月庚午、国師号を賜わったこと、同十四年五月辛丑、釈迦也失の辞帰に当り、御製の贊・仏像・經典・法器・衣服・金銀を賜わったこと等が記されている。ジャムチェンの入明について詳しいのはジグメ (Higs-med nam-nkhab, 十八世紀末—十九世紀) の『蒙古仏教史』である。すなわち、永楽帝は有雪国チベットから依処となるべき僧を招こうと思ひ立ち、主宝者ツォンカパの美名を聞いて、四人の大臣を使者として送った。使者はツォンカパに逢い永楽帝の意向を伝え、布施の品々を贈ったが、ツォンカパ自身は

「rje ran-nid rgya-nag-tu phebs-na dgag-bya-che shin/dgos-pa chun-bahi-rgyu-mtshan dan-bcas gsunns nas mi-hbyon-par thag-basd/ 尊者自身が中国に行くならば、妨げとなることのみ多く、必然性少なき理由あるをさまざまに説きて、行かざることを決せりと云えり。」

とある。そこで、使者達はツォンカパが来ること不可能ならば、彼に匹敵する弟子を送ることを乞い、ここにチュジュエの入明が実現したのであった。なお、『蒙古仏教史』にはチュジュエ入明前後の様相、永楽帝との会見の様相、チュジュエによる説話的奇瑞等を記し、さらに帰国

後、セラに大乘院 (Theg-chen-glin) をツォンカパの命によって建立し、その後、永楽の招きにより再度入明したが、永楽帝は薨じ、次の宣徳帝によって、前帝同様恭敬を受けたと述べている (橋本光宝校訂本一七三頁—一八一頁)。

右の『蒙古仏教史』の記述中、問題となる点はツォンカパが永楽帝の招聘を辞退した理由であるが、右書の記述によれば、「dgag-hya (妨げをなすこと) 大であり、しかも、dgos-pa (必要性) 少なく」と云っているが、この妨げの実態として、当時の漢蒙蔵三民族の関係から当然、蒙古に対する配慮を挙げることが出来よう。ツォンカパがこの時、明朝の招きに応じなかったことが、やがては彼の流れを汲むゲルクパが蒙古の軍勢力を裏楯としてチベット仏教各派中の正統派として、ダライラマを擁し、全チベットに君臨し得たのである。しかも、このような蒙古民族ないし蒙古の軍勢力に対する配慮は、十四世紀から十五世紀に掛けてのチベット国内における仏教々団各派と各民族との相互関係——ランダルマ (Glan-dar-ma, 九世紀末) の破仏以後、統一王朝を失ったいわゆる後伝仏教時代のチベットにあっては、各教団は各有力氏族を外護者とすることによって、その教勢拡張を計り、各民族もまた、有力教団の外護者たることによって、その宗教的権威を利用して自族の勢力拡大につとめるといふ——蒙古王アルタンと結びついたゲルクパの前身ともいふべきカーダムパ (Bkai-gdan-pa) とヒム (Hihrom) 氏およびマル (Mar) 氏、十三世紀に入つては、バクバ (Phags-pa) を仲介として蒙古と結んだサキヤパ (Sa-skya-pa) とモン (Hkhon) 氏との結びつき等のごとく、後伝仏教における諸教団

は強力な武力的後楯なしにはその教勢を上げるのが不可能な情勢にあった。しかも、そのような風潮のなかで、各教団が裏楯として求めた武力は国内の各豪族ないし蒙古民族の提供するものであり、十四世紀の中葉、元朝が滅亡した直後は、特に漢民族によって新に冊立された明朝の圧迫から逃れることを目的として、蒙古民族との連携を求めたのであった。このようなチベット仏教界、というよりチベット社会の複雑な情勢が、ツォンカパをして、明朝永楽帝の招きに対して「妨げ多く、必要性少なし」とこれを拒否し、その弟子チュジュエを代理として送った真因と考えることが出来よう。

チュジュエと同様に明朝永楽帝の招きに応じて入明し、永楽帝の帰依を受けたもう一人の僧に、カルマパ (Karma-pa) の第五代デシンシエ (De-shin-gesgs-pa; Harima, 哈立麻、一三八四—一四一五) が居た。中国側の資料である明実録に記載されるところによると、哈立麻に関する記述は、太宗文皇帝実録中の卷之十六、永楽元年 (一四〇三) から始まり、永楽十一年 (一四一三) までにおよび、その後、十三年以降は哈立麻に代つて前述のチュジュエ釈迦也失が現われて来るのである。永楽元年二月乙丑の項に

「遣司礼監侯頤齋書幣一往^二烏思藏、徵^三高師哈立麻。蓋上在^二藩邸^一時、素聞^二其道行卓異、遣^三人徵^レ之。」

とあり、永楽帝は哈立麻の僧としての卓越していることを聞いて、早くからこれを招かんとしたことが誌されている。その後、永楽四年 (一四〇六) 二月、哈立麻の方から、仏像等を献ずることがあって、同年十二月、再び迎使を派遣することあり、十二月巳酉、

「尚師哈立麻至_レ京入見_ニ上_ニ奉天殿。」

と、ここに哈立麻の入明が実現したとされている。その後、永楽帝よりさまざまの布施を賜わり、如来大宝法王の称号を贈られ、これに対して哈立麻から法施として、永楽五年（一四〇七）二月、靈谷寺において普度大齋を建て、同年秋七月、山西五台において同じく大齋を行う等のことがあり、永楽六年（一四〇八）夏四月、辞帰に当っては、白金・綏幣・仏像等の物を贈り、中官によって護送されたと記している。さらに帰藏の翌年二月、翌々年の春正月、同十年（一四一一）五月にはその徒、輟藏等を送ったのに対し、それぞれ鈔幣・衣服等を賜わったことが記されている（田村実造・佐藤長編明代西藏資料、明実録抄四八頁—六二頁）。『蒙古仏教史』にも哈立麻が永楽帝に招かれて入明した事実は誌されているが、その内容は信仰的讃辭に終っている（上掲橋本本一五六頁—一五七頁）。

永楽帝と哈立麻の接近は、その実態は別として、周知の事実であるが、その接触の遠因とも考えられるものは、当時のチベット仏教各教団内におけるカルマパの位置に由来するものではなからうか。すなわち、哈立麻が所属するカルマパは元代、サキヤパとクビライの寵を競い、サキヤパに破れり、また、ゲルクパとも蒙古の軍勢力を裏楯としてその勢力を競い合ったが、結局、かのダライの制はゲルクパのものとされたという因縁を持つ教団であった¹⁰⁾。すなわち、蒙古に接近しようとしながらも意の如くそれを果し得なかつたカルマパの哈立麻を永楽帝は尊重し、哈立麻の側からも積極的に明朝に近づこうとした点に、当時における漢蒙蔵三民族の、というよりはチベット仏教に対す

る漢蒙両者の交流の機微を探り得るのではなからうか。

次に明朝によって執られたいわゆる八大教主の制であるが、この制度は一般には明朝が前代の元とサキヤパの結びつきによるサキヤパの勢力集中を排除するための分割的支配体制樹立の現れとされている。明朝の主たる意図がそこにあったとしても、一面においては、チベット国内において、サキヤパのごとく他に比して卓越した勢力を有する教団が出現することは明朝のチベット支配上、望ましいことではなかつたであろう。が、他面、特にそのサキヤパが蒙古との接触緊密なるにおいては、これを分断するために、従来のサキヤパ一辺倒を排することは明朝にとつて重要な施策の一つであった。さらに、チベット国内においては、十四世紀に入り、パグモドゥパ（Phags-mo-gru-pa）のチャンチュブゲルツェン（Byan-chub-rgyal-mtshan, 一三〇二—一七三）が現われた頃から次第に、従来のサキヤパの優勢に代って、パグモドゥパの擡頭が始まり、明朝成祖永楽帝はこの派との接触を計ったのであった。そして、明朝とパグモドゥパとの接近が、かつて元とサキヤパとの接触によってサキヤ王朝の出現を招来したのと同じ轍を踏むことを恐れたチベット国内の各宗派・氏族は競って明との接近を計ったのであった。かくて、八大教主制も明の蒙古チベットの接触に対する阻害の意図と、チベット国内における各宗団の勢力争いの所産として生れたものと云えるのである。

む す び

本稿は明代におけるチベット大蔵経、永楽・万曆両版の開版につ

いて、その歴史的背景を探ることを目的としている。この観点から云

えば、永楽版が雕版されたといわれる永楽八年（一四一〇）、万暦版の開版の年とされる万暦三十年（一六〇二）、すなわち、十五世紀の初旬から十七世紀初頭にかけての時代は、ツォンカパの改革直後から、明の末期、満洲族の清朝成立の直前までの時期であり、チベット国内にあつては、各教団がより強大な武力を背景として、自派の強権拡張を策した時期、そして、そのような時代相のなかで、ツォンカパの流れを汲むゲルクパによる法王制の樹立した時代であつた。法王制の成立はチベット社会において、武士豪族の支配に代つて僧侶教団による社会支配の確立を意味するものであつた。他面、中国本土においては、元朝の統治を打破して明代を作り上げた漢民族が、一面では元同様にチベットに対する懐柔・統治を継続すること、他面では蒙古民族による北辺の侵害を防備することに腐心しなければならない時期であつた。しかも、明朝がいわば両面作戦を展開しなければならない時期であつた。しかも、明朝がいわば両面作戦を展開しなければならない時期であつた。しかも、明朝がいわば両面作戦を展開しなければならない時期であつた。このチベット、蒙古両民族が、武力と宗教という、彼等が持つ二つの力を結び合わせるという現実に直面する時、チベットを明朝の側に近づける方法として、チベット仏教の活用を意図すること当然の帰結である。そして、その具体的な現れが、チベット仏教において指導的立場にあるラマの招聘となつて現れたのである。しかも、明代中国仏教の一つの特色が大蔵経の開版事業であつたとするなら、明朝がいわゆる永楽版等のチベット大蔵経の開版事業を敢行したと考へても、これはまた、自然の理と云うことが出来よう。永楽・万暦両版開版については、その背景から云えば、それはなるべくしてなつた当然の結果

と見ることが出来るのである。

しかしながら、背景は背景として、チベット本土において、言葉の厳密な意味での大蔵経の開版を見たのは十八世紀の三十年代におけるデルゲ (Sde-dge)・ナルタン (Nar-tan) 両版であり、現存するチベット大蔵経としては、それ以前に清朝康熙帝治下の康熙二十二年（一六八三）成立の康熙版北京大蔵経が存在する¹⁾。康熙版の開版より三百年近くもさか上る十五世紀初旬に、チベット大蔵経開版の背景は存在したとしても、大蔵経開版事業が如何に膨大な労力と財力を必要とするかという点におもいをいたす時、明代において果して眞実、永楽・万暦両版の開版がなされたのであろうか。また、康熙版のチベット語序文中の

「Bkaḥ-ḥgyur gyis par-yan shar-bryos-bahi phan-yon chen-po ni/

カーギユルの形で、再び印刻する善果たるや、大なるものあるなり。」

という言葉が永楽版や万暦版の存在を示すものであるのか、さらには、ジグメの『蒙古仏教史』中に、ジャムチェンが帰藏後、ツォンカパの命によつてセラの大乗院を建立し、寺内に「自ら中国より将来せる白檀製の十六羅像を安置し、

Rgya-nas bstams-pahi bkaḥ-ḥgyur no-mtshad-can-nams ḥjog-

pa gnau nas/

ギヤ(?)より持ち来つた不可思議のキャンギユル等の所持せるものを与え……」

とらう」の「Rgya-nas bstams-pahi bkah-hgyur」が何を指すのか、Rgya は Rgya-nag (中国) なのか Rgya-gar (印度) なのか等、永楽・万曆両版の開版については、その史実そのもの、ないしその開版の経緯について、さらに詳しく検討すべき多くの問題を含むと云えるのではなからうか。

〔註〕

① Waddell の *Man'u* 一三二〇年頃、*Bkrah-hgyur* の蒙古語訳が *Sa-skya-pa* の *Chos-kyi-hod zer* に *sa* *Sa-skya Paṅdita* の下に至元録の編纂に従事した二十九人の協力によってなされたというが (Lamaism, 一五八頁)、これについても稿を改めて明らかとしないでならぬ (橋本本 *Jigs-med*, 一七八頁参照)。

② 太祖が胡風の一掃、唐宋の伝統への復帰を命じたのも、その現れであらう。

③ 明史卷一、本紀第一、太祖一「至正四年(一三四四)、早蝗大饑疫、太祖年十七、父母兄相継歿、貧不克葬。……太祖孤無所依、乃入皇覺寺、為僧」。

④ 元朝とチベットとの関係については本学紀要十四所収の拙稿参照。また、ダライラマ制の成立については『大崎学報一一〇号』所収の拙稿参照。

⑤ 『蒙古源流卷第五』の記述によれば、也先汗に捕えられた明の英宗、*Ji-h-gtai-kan* (正統汗) は *Molo* (摩羅) なる娘によってかしくかれ、この摩羅によって一子をもうけているから、捕虜とはいいいながらも、全く孤独な幽閉の生活を送った訳ではなかったのであらう。

⑥ 明朝歴代の皇帝について、その生歿の年・在位年数・若干の行績等については『蒙古源流卷第八』に記されているが、蒙古諸汗との戦闘については、英宗正統汗が也先汗に拉致されたことが記される以外、源流には詳記されていない。

⑦ 三代ダライと *Altan* の交流については『蒙古源流卷第六』の末から巻第七に、また、五代ダライと *Gushi* の交渉については同じく巻第八に、総じて蒙古民族とチベットとの交流については *Jigs-med* の “*Hor-chos-hbyun*” に詳しい。

⑧ 八大教王の制度は各教団が明朝との結びつきを求めた結果、成立したものであるが、その経緯については後述する。

⑨ *Jigs-med* の “*Hor-chos-hbyun*” は忿怒の面前に *Karma-paksi Chos-kyis-bla-ma* と *Hphags-pa* と神通を競って敗れたとらう記載がある。

⑩ *Karma-pa* と *Dge-lugs-pa* の争ひについては “*Dpag-bsam-lion-bzan*” 中に散見出来る。

⑪ 本学紀要第二十五所載の拙稿、鈴木学術財団『研究年報三・八』所収の羽田野伯猷氏「チベット大蔵経縁起」参照。